

問9 被災地への医療支援活動

薬剤師の国家資格を持った教員1名が以下のように医療支援活動を行った。

① 日本薬剤師会（徳島県薬剤師会を通じて）の要請により

4月6日～4月10日（実質3日間の活動）の報告

1. 4月6日 17:00 宮城県薬剤師会に到着。県薬幹部より状況説明。宮城県石巻市を拠点として活動。活動内容①調剤業務（石巻高校、女川町立病院、同町立総合体育館など）②避難所への OTC 供給と健康管理③避難所の衛生管理（トイレや調理など）④その他。当日現在 死者12,344人 行方不明者15,237人 避難者163,712人。
2. 4月7日 四国4名のうち1名は石巻高校での調剤業務（約130枚/日） 他の1名は女川町立病院での調剤業務（約150枚/日） 私ともう1名は女川周辺の避難所を巡回し OTC の供給と健康相談に就く。調剤業務は該当2名の希望であったため 私たちは避難所を担当することになった。石巻周辺には108箇所の避難所が確認されているが 未確認（主に個人宅を避難所としている箇所）の避難所も点在している。1日中女川周辺を巡回したが 10箇所程度を回ることが限界であった。女川周辺は 薬剤師の巡回もほぼ行き届き 不足薬（消毒薬、カットバン、咳止め、鼻炎薬、便秘薬など）を補充した。もちろん被災された住民には全て無料での提供である。口内炎や便秘を訴える人も出てきており 長期化する避難生活における栄養管理（ビタミン不足や野菜摂取）に注意が必要と思われた。なお 港付近を歩いている住民に声掛けすると 医薬品はまったく手持ちがなかった。個人宅に避難している10名足らずであるが 必要と思われる医薬品を提供した。津波で塗れた（汚染）カットバンを乾かして子供の傷口に貼っていたので 適切な対応を促した。被災者の皆さんは 私たちを好意的に受け入れてくれているが 炊き出しに並んでいる住民の列を 当たり前のように横切る支援者には閉口する。薬剤師にそんな者はいないと思われるが 細やかな言動が期待される。
石巻高校教室（女性保健室）で雑魚寝（約10名）。私は車中（いびき防御）で就寝。23時過ぎ震度6の余震発生。自衛隊員が数分後より石巻高校に避難してくる住民のために誘導準備に入る。私も速やかに誘導の補助に入るが 他の薬剤師たちにも声掛けを行い 任務以外の支援活動を願う。2時前津波警報が解除され その任務も解除。昼間の支援活動で疲れていると思われる薬剤師たちも 嫌がらず全員で協力できたことに感謝。この余震で また新たな被災者が出た模様……。停電 断水。
3. 4月8日 6時起床し朝食 打ち合わせ 清掃ののち支援活動に入る。私は一人で 7時40分石巻市高陽小学校にて 東海大学医療班（調剤担当）と活動する予定であったが 昨日の余震の影響を受け予定が急遽変更となる。せっかく火を入れてもらった保健室の石油ストーブの火を消す。石巻高校に戻り 支援備蓄医薬品の整理をする。早い昼食（カップ麺とソイジョイ）を済ませ 月の浦の避難所に向かう。片道約1時間 信号機は消えていた。女川を過ぎた辺りから 道路状況 さらに劣悪。路肩の崩れや 中央付近までパツクリと口を開いた道路が散見され 慎重に走行することが求められた。キャベジンや痔の薬が求められたが 痔の薬は持参していなかった。排泄を我慢している住民もあり 今後は痔の薬を持参すべきと思われた。荻浜小学校にも避難者がいると聞き訪問。熊本大学医療班が1回/週の診療に入っている様子だが OTC の備蓄が全くなかったため 必要と思われる医薬品を提供した。月の浜より奥にも訪問すべきと思われたが 勇気を出して本日は断念した。女川を17時頃までに通過して石巻方面に戻っていないと 道路が海水で埋まり通行不能になるから。16時50分頃 冠水場所を通過

したが すべてに海水の流入が始まっていた。月の浜方面に半日で訪問するのは 効率が悪く 1 日掛けて巡回すべきと考えられた。昨夜の余震を教訓に 本日は飲酒なしで車中の寝袋に潜り込む。

4. 4 月 9 日 定刻に起床し女川町立病院の調剤業務に入る。医師 1 名 看護師 1 名 理学療法士 1 名に私が同行し訪問診療に向かう。残りの 2 名は同病院で外来調剤 もう 1 名は町立総合体育館での調剤業務。女川の避難所を巡る訪問診療であったが 医師の求める薬剤がなく変更を願うことしばしばあり。だいぶ医療班の活動も効を奏し 比較的落ち着いた診療ができていた。両肩に薬剤バックを背負い 避難所巡りを行うのは体力的に厳しいと感じざるを得なかった。体力の充実した若い薬剤師の活動に期待したい。17 時頃 新たに派遣されてきた薬剤師班に引継ぎをして石巻を後にして 一路仙台市に向かった。任務を果たせた満足感と ほんの一時の支援で帰宅してしまう罪悪感とが混雑し 表現しにくい心境に陥った。
5. 4 月 10 日 肩の張りや筋肉痛。仙台市から羽田経由後 各自帰路に就く。私は東京で 1 泊しながら 本報告書を作成。また 資料を準備し明日の大学での講義 (10 時 50 分から) に向かう予定。

総括：宮城県石巻周辺の被災状況も深刻なものであった。医療班の活動も他の支援活動と同様に被災された方々に大きな貢献をされていることを実感した。何ができるかではなく 何でもやる心構えを持つことが大切なのだと思われた。待っていたのでは何もすることはないが 考えてみれば やれることは山ほどあるような気がした。予測しなかった余震での住民誘導。少なくとも石巻高校に待機していた薬剤師全員で協力できたことに感謝したいと思う。今後 支援は長期化すると思われ 継続的な支援の在り方を誰かが真剣に考えていくことが求められる。医療の提供においても刻々と変化するニーズにどう対応していけるのか、そして薬剤師がどのように関わっていけばよいのか。薬剤師だけの狭い世界観を捨て、医師や他の医療スタッフとともに被災者支援を真剣に考えていくことが重要と思われる。「せっかく片付けも終わりがけたのに、また全部ひっくり返った」震度 6 の余震後、一人の住民の声。絶望に近い声のように聞こえてきた。支援者の私たちに終わりはあるが被災された方々の終息はいつになるのかは分からない。

以上 本学教員の手記より

② 徳島県保健福祉医療政策課の要請により

第 21 班 (5 月 15 日～5 月 19 日：実質 3 日間の活動)

・チームは 医師 2 名 (K 医師, Y 医師) 看護師 2 名 薬剤師 1 名 理学療法士 1 名 事務 1 名 災害支援ナース 2 名の総勢 9 名。

・活動拠点は 石巻市立 万石浦中学校。

・第 6 エリアという地域の災害医療支援を行うとともに 今後の展望およびニーズの掘り起こしを行うことが主な任務として理解 (少なくとも数カ月は継続的な支援が求められている)。

宮城県庁で第 20 班から引き継ぎを受けました→ 3 日間の活動日程の中で、1 日の休診日を設けたこと。第 21 班も同様な活動で良いであろうこと。開業医の受診および調剤薬局の利用を促していくこと。エリア統合が進み、終わりを考えていく時期であること などなど。

避難所であった涼風園およびアイワ GH は、通常の入所施設にもどり往診の必要もなくなり、主な業務は万石浦中学での外来診療となっていました。万石浦中学校での 1 日の受診者数は 20 名にも満たない状況でした。

私自身は万石浦中学校の業務に終始しました。医師が院外処方箋を記載する時の相談を受け、患者さんに服薬時の指導を行い、薬局からの疑義照会を受けることでした。時間が余ったので、ほとんど使用しなくなった薬品の在庫調べを行いました。

確かに。定点としての診療所のニーズは減ってきていると思われます。統合して撤退することも時期を見て判断されるべきと考えられます。しかし、再開した地元の診療所が直ちに万全の態勢で医療を提供できるとも限りません。実際、地元の診療所が診ている筈の施設から、往診依頼もあった訳で、すでに移管したから往診は行けませんとするのか 臨機応変に対応するのかは、その時々
の医師の状況判断によるのでしょう。

今 医療救護班に求められるものは 現状をしっかりと見極め どうやって地域の医療を再生していくのかを考えていける人ではないかと感じます。診療所だけが医療支援ではない筈です。在宅医療（訪問診療も）のニーズは本当はないのでしょうか。まだ支援しなければならないことがあるような気もするのですが。

少なくとも 今のままの県医療救護班の業務の中で 薬剤師の必要性は見当たりません。一人薬剤師でしたので勝手に出歩くことは控えざるを得なかったことが悔やまれますが 他にやれることがあったのではないかと反省しています。

以上 本学教員の手記より